

二〇二五年度 一般選抜 学力検査(国語)

現代の国語、言語文化  
(古文・漢文を除く)

解答番号

1

}

28

一 次の文章を読んで後の問い（問1～問9）に答えなさい。

二〇二〇年三月あたりから、日本社会でも新型コロナウイルス感染症が猛威を振るいだした。同じ年の四月には緊急事態宣言が発出され、社会活動はかなり制限されていた。その後も宣言は複数回出され、二〇二二年に入っても、事態は収束していない。

コロナ禍は、私たちが取り結ぶつながりのあり方に、きわめて大きな影響をもたらした。人との接触や懇親は「不要不急」の範疇はんちゆうに入れられ、接触をなるべくひかえるよう要求された。政府の求める「新しい生活様式」では、人との距離をおいたり、マスクを着用したりと、とかく他者と深く接しないことを求められた。

コロナ禍、あるいは、コロナ後の人間関係を考えるにあたって重要なのは、<sup>(1)</sup>つながりが資源の色合いを強めているただなかにコロナ禍ワにオソワわれたということである。

「新しい生活様式」や「不要不急」が声高に叫ばれるとともに、私たちは「人間関係の棚卸し」をいつせいに始めた。なかなか人と会えないなかで、それでも会うべき人はどのような人なのか、国民全員がいつせいに考え出した。

その結果、直接会うに足る魅力のない人は、つながりから排除されていた。まさに「接触の選別」とでも言うべき現象が、この二年半の間で引き起こされたのである。

「接触の選別」が進んだことで、コストに見合ったパフォーマンスを発揮できないつきあいは、よりいっそう「無駄」と見なされる傾向が強まった。その典型のような調査結果が日本生命保険から提示されている。

日本生命の調査は、二〇二一年一〇月にインターネット上で実施され、七七七四人の男女が回答している。注目を集めたのは、「職場の方との飲みニケーション」は必要だと思いますか？という質問に対する回答である。

この質問に「必要」と答えた人は一一・一%、「どちらかといえば必要」と答えた人は二七・一%おり、両者を合計しても三八・二%にとどまる。一方、「どちらかといえば不要」と答えた人は二五・〇%、「不要」と答えた人は三六・九%にまで上る。「どちらかといえば不要」と「不要」の合計は六一・九%である。

## II

「どちらかといえば不要」と「不要」の合計が「必要」と「どちらかといえば必要」の合計を上回ったのは、調査が始まった二〇一七年以来、初めてのことである。さらに注目すべきは、「不要」と答えた人が突出して多いことだ。

この結果は、コロナ禍をつうじた人間関係の棚卸しの実情を示している。人と会うことじたいが「不要不急」の範疇に入れられ、誰もが直接会って話すべき人を吟味した結果、飲みニケーションは不要の範疇に入れられてしまった。

コロナ禍で人と思うように会えなくなった時間は、人びとの孤独感を喚起し、人とのつながりの重要性を再認識させてくれた。その一方、コロナ禍でつながりの棚卸しに要した時間は、「今までとくに考えずつきあっていたけれど、よくよく考えると無駄だと思えるようなつながり」を浮かび上がらせてしまったのである。

コロナ禍を経て、人びとが「会いたい」と思う人とだけ会う傾向は、ますます加速するはずだ。

## III

会いたい人とだけ会うようになれば、多様な意見に触れる機会もますます減ってゆくだろう。人は想定しない出会いを経験するからこそ、多様な価値観や意見に触れることができるのである。人間関係の激変期を生きる私たちは、その点にもっと留意する必要がある。

コロナ禍により、もともとつながりの薄い人は、さらに深刻な状況に陥っていった。「接触の選別」をつうじて、孤立にいたらず<sup>(1)</sup>フミとどまってきた人びとの居場所は、深く傷つけられてしまったのである。

## A

次のようなケースを思い浮かべてほしい。  
親しい人と会わなくてもとくに気になることはない、という人も一定数はいる。なじみの飲食店に通うこと、ショッピングモ-

ルに赴くことなどにより、気分転換をしている人もいるだろう。

## IV

コロナ禍によって、なじみのお店、なじみの場所に行き、おたがい名前は知らないものの、顔は知っている。そんなユルやかな接触をつうじた、会話を交わさないコミュニケーションは、難しくなった。

飲食店の時短営業のさなか、私の知人は、お店にも行けないため、毎日自室でコンビニの弁当を食べていた。お店にも行かず、一人自室で弁当を食べる生活は精神的に厳しかったと語っている。

その知人は結婚もしておらず、転勤族のため、地縁も存在しない。人と会うことを「不要不急」とされてしまうと、知り合いていどの人を軽い気持ちで誘うのものはばかられる。結果として、さびしさを抱えたまま、自室で一人弁当を食べる以外の選択はない。

NPOなどによる居場所や相談場所の運営も停滞している。子どもの居場所として機能していた子ども食堂の多くは、新型コロナウイルス感染症の流行により休業を余儀なくされた。対人接触を要する見守りの試みも、密を避けるという理由で滞り気味である。

コロナ禍が収束しても、集団のメンバー全員を対象とした懇親会は、今までのようには開催されないだろう。先ほどの飲みニケーションの調査からもわかるように、懇親会はやりたい人だけやればよいという考えが強まっているのである。

## B

、とくに積極的に誰かを誘うことはなくとも、全体の懇親会があったからつながりの輪に入り込めていた、という人も少なからずいるはずだ。誰もがつながりのために積極的に動けるわけではないし、積極的に人を誘うのに疲れを感じる人も多い。メンバー全員を対象とした懇親会は、そうした人がつながりを保つにあたり、重要な役割を果たしていた。懇親会を無駄と見なすようになってしまえば、そうした人はひっそりと、つながりの輪から外れてゆくであろう。

新型コロナウイルス感染症の流行により、もともとつながりの基盤の薄かった人は、ますます苦境に立たされるようになったのである。<sup>(3)</sup>

コロナ禍が押し進めたもうひとつの現象が、オンライン化の浸透である。今や日本国民の大多数が携帯電話またはスマートフォンをもっている。端末には連絡・通話用のソフトが実装され、安定的な電波網がそれを支えている。

このような環境のもと、多くの人が端末をとおしてソトの世界に常時接続し、いつでもどこでも連絡をとれる体制は、コロナ前には整っていた。実際に、日本国民の多くは、LINE<sup>(注)</sup>をつうじて常日頃から連絡を取り合っている。

常時接続の環境が整っていたとはいえ、私たちの多くは、人と直接会って話をするをオンラインの発信よりも「よいもの」と見なしていた。コロナ前は、人と直接会わずに交流する環境は、技術的には整っていたものの、文化的にはまだまだ受け入れられていなかったのである。

しかし、コロナ禍は、オンラインにまつわる時計の針を一挙に進めてしまった。人との接触を「不要不急」と見なした「新しい生活様式」は、オンラインの交流を文化としても「許容しうるもの」として浸透させたのである。

人との接触が「不要不急」と見なされたコロナ禍において、日常生活は、オンラインの実効性を試す壮大な社会実験の場となった。二〇二〇年四月の最初の緊急事態宣言のもと、人びとは、対面で行ってきたさまざまな物事をオンラインに置き換えていった。

さまざまな物事をオンラインに置き換えたことで、人と直接会うことの価値が見直された向きもたしかにある。しかしながら、オンラインの交流・発信が私たちの生活に浸透してゆく流れは止まらないだろう。

理由は簡単だ。オンラインは対面に比べはるかにわかりやすい利点をもっているからだ。オンラインの利点を尋ねられると、多くの人が、移動の手間が少ない、出張費用がかからない、遠隔地に住む・障害があるといった何らかの不利な条件を抱える人でも利用できる、好きな時間・場所で見られる・参加できる、といったことをあげるだろう。

一方、対面の利点はどうだろうか。なかなか思いつかないという人もいるだろう。深い対話ができる、雑談ができるといった

特性をあげる人もいるかもしれない。しかし、その点を証明するとなるとことのほか難しい。<sup>(5)</sup> 対面の利点はオンラインの利点に比べると、証明しづらいのである。

かりにあなたが管理職についているとしよう。あなたは、会議を対面で行ったほうがよいと考えている。一方、チームのメンバーはそう考えていない。**C**、時間やコストの面からもオンラインのほうがよいと考えている。

こうしたときにあなたは、チームのメンバーを説得できるだろうか。メンバーから「オンライン会議でも対面と遜色なくできます。むしろコストの面で優れています」と言われてしまうと言葉に窮するだろう。

長期的な影響はわからないものの、目先のコスト計算ならば確実にオンラインのほうに軍配が上がる。他方、対面の効果は曖昧だ。**D**、オンラインの交流・交信が私たちの生活に浸透してゆく流れは止まらないのである。私が所属する早稲田大学で

も、ほぼすべての授業が対面で行われていた二〇一九年以前の状況に戻ることは、おそらくない。

(石田光規『「友だち」から自由になる』による。出題の都合上、一部中略した箇所がある。)

(注) LINE——オンラインでメッセージなどをやりとりできるサービス。

問1 傍線部(ア)と(ウ)と同じ漢字を含む熟語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、  
1  
2  
3

(配点6点)

(ア) オソ|われた  
1

- ① 落語家が二代目をシユウメイする。
- ② 妹は皆からシユウサイと呼ばれている。
- ③ 異国でキョウシユウの念に駆られる。
- ④ タイシユウに支持された政治家。
- ⑤ 長年使った時計をシユウリに出す。

(イ) フ|み  
2

- ① 極端な思想にケイトウした青年。
- ② 彼は自分の言葉にトウスイする癖がある。
- ③ 長いトウビョウの末見事に快復した。
- ④ 最新の機器をトウサイした船。
- ⑤ ついに百名山のトウハを果たす。

(ウ) ユル|やかな  
3

- ① 被告人にカンダイな判決が出る。
- ② カンセイな住宅街に住む。
- ③ 今度だけはカンニンしてほしい。
- ④ 新入生をカンゲイする。
- ⑤ 見事にカンキユウのついたダンス。

## 問2

次の文は本文の一部であるが、文中の **I** ～ **V** のどこに入れるのが最も適当か。次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、**4**。

(配点3点)

このような社会は、つながりの資源としての要素をいっそう際立たせ、つながりの格差をさらに広げてゆく。

- ① I      ② II      ③ III      ④ IV      ⑤ V

## 問3

空欄 **A** ～ **D** を補うのに最も適当なものを、次の①～⑧の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。ただし、同じ番号は一度しか選べない。解答番号は、**A 5**、**B 6**、**C 7**、**D 8**。

(配点8点)

- ① ひいては      ② ところで      ③ たとえば      ④ だからこそ  
 ⑤ むしろ      ⑥ もしくは      ⑦ ましてや      ⑧ しかし

#### 問4

傍線部(1)「つながりが資源の色合いを強めている」とあるが、どういうことか。筆者の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、9。(配点6点)

- ① 人とのつながりこそが、社会を形成するうえで結局は最も大切なものであり、つながり合える友達や仲間は人が生きていくうえでの資産になる、ということ。
- ② 人と接触する時間というものについて、人間関係をコストとパフォーマンスの観点でとらえる立場から考えられるようになった、ということ。
- ③ 他者と深くつながりたくない、という思いが、他人と距離をおいたりマスクを着用したりするなど、物質的なかたちで明示されるようになった、ということ。
- ④ 人と直接接触する代わりに端末を用いて人とつながることが主流になるにつれ、端末の材料や電力として多くの資源が消費されるようになった、ということ。
- ⑤ つながる相手を選別し、つながるための時間を必要以上に使わない、という考え方が、コロナ禍によって日本社会に沸き起こりにわかに広まった、ということ。

## 問5

傍線部②「注目すべきは、『不要』と答えた人が突出して多いことだ」とあるが、筆者はなぜこれに注目すべきだと考えるのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、10。(配点5点)

- ① 職場で参加を強要されることが多かった飲みニケーションに対して、自分の意志で明確に拒否の表明ができる人が増えたことは、働き方の進歩だと評価するから。
- ② 感染症が流行して一年しかたない時期の調査なのに、人々の意識が大きく変わったことに、コロナ禍の影響力の大きさを痛感するから。
- ③ 人と接触しにくくなった状況に多くの人々が孤独感をおぼえ、人とのつながりの重要性に気づいたことが、喜ばしく感じられるから。
- ④ 「どちらかといえば不要」「不要」の合計が過半数となったことは、人々が人間関係の無駄を意識したことを示す、好ましい結果だから。
- ⑤ 直接会うに足る魅力のない人がつながりから排除される風潮がよしとされれば、多様な価値観や意見に触れて視野を広げる機会が失われていくから。

## 問6

傍線部③「ますます苦境に立たされるようになった」とあるが、ここでいう苦境とはどういう状態を指しているか。筆者の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、11。

(配点5点)

- ① コロナ禍で声を出しての会話が制限されたため、懇親会に出席しても新たな知り合いを作れない、さびしい状態。
- ② 子ども食堂の運営が停滞したことで、食事を満足にとることもできなくなり、居場所さえも失った孤独な状態。
- ③ 懇親会の開催を呼びかけても、それを無駄と感じて参加しない人が増えたため、手ごたえが感じられない状態。
- ④ 人とのつながりの輪に入るきっかけが失われ、孤独から脱する機会がないまま、さらに孤独を深めていく状態。
- ⑤ メンバー全員が互いに接触することがなくなり、集団を維持することが困難になって、生産性が下がった状態。

## 問7

傍線部(4)「オンラインにまつわる時計の針を一挙に進めてしまった」とあるが、どういうことか。筆者の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、12。

(配点6点)

- ① オンラインを急いで普及させなければならなくなったため、常時接続の環境をすぐに整える必要に迫られ、技術的な進歩が早まった、ということ。
- ② オンラインでの交流には、簡潔でわかりやすい用語や表現が使われがちなので、互いの意向を的確かつ迅速に理解し合えるようになった、ということ。
- ③ 人間関係を構築するうえでは人と直接会って話すことが重要と考える文化が、オンラインの交流を許容する文化に塗り変えられた、ということ。
- ④ オンラインによる交流は、移動の手間がかからずただちに人と接触できるため、会話が進み結論に至るまでのスピードが高まった、ということ。
- ⑤ オンラインの実効性について、図らずも社会全体が壮大な社会実験の場となり、さまざまな試行錯誤がくり返されてきた、ということ。

## 問8

傍線部(5)「対面の利点はオンラインの利点に比べると、証明しづらいのである」とあるが、なぜか。筆者の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

13。

(配点5点)

- ① すぐには利点が思いつかないうえに、対面の効果は曖昧で長期的な影響を立証することが難しいから。
- ② オンラインの交流が社会全般に浸透していく傾向は、コロナ禍のせいもあって、もはや止めようがないから。
- ③ コストを計算して数値として利点を示しても文化的な価値の高さを証明するのは困難だから。
- ④ 管理職の立場でこそ利点を実感することができるのであり、チームのメンバーの多数意見に対抗できないから。
- ⑤ 深い対話や雑談といったものは、メンバーそれぞれの性格によってその価値が異なるので、一般性に乏しいから。

## 問9

本文の内容に合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

14。

(配点6点)

- ① 政府による緊急事態宣言の発出により、国民は人間関係について考える暇もないまま、人との接触を禁じられた。
- ② 一見無駄に思えるようなつきあいやつながりも、多様な意見や価値観に触れる機会になり、意味のあるものである。
- ③ 家族がおらず地縁もない人は、自分の気分転換の場を確保するため、積極的に人を誘うよう心がけるべきである。
- ④ コロナ禍前に対面の交流が人々に評価されていたのは、オンラインの交流を支える技術が不十分だったからである。
- ⑤ オンライン化の浸透により、逆に直接会う利点が改めて意識され、今後は対面の交流が見直される可能性が高い。

二 次の文章を読んで後の問い（問1～問9）に答えなさい。

次の引用は、ある店でのエピソードである。

店で車を見ていて説明を受けていた販売員のおじさんが途中「出身はどちらですか？」と聞いてきた、兄が「茅ヶ崎（注1）です」と答えた。すると販売員は「?????」というような表情をしてからもう一度同じことを聞いた。兄もまた同じ答えを返す。すると販売員は「日本語が流暢りゅうしょうなので」と言ってから「ご両親はどちらのご出身なんですか？」と質問してきた。この人は自分が失礼なことをしていると気づいていない。もしも私たちの外見がいわゆる「日本人」だったとしたら同じ質問をしたであろうか。

こうした場面においては、もっぱら外見と言語という側面から、特定の集団への相手の帰属化がなされている。つまり、日本の人種的マジョリティと外見上異なる人々は、まず「外国人」に振り分けられ、そのなかで流暢な日本語を話す人には、本人や両親の出自が問われ、「日本人」か否かが詮索される。そのようにして、日常生活の些細ささいな場面で、国家に帰属する者とそうでない者が、法律上の国籍とは異なる水準（外見と言語）で判断される。

このとき、<sup>(1)</sup> 相手を特定の集団に帰属化している人は、そうすることで自らを社会のなかでの優位集団（日本人）や集団内部の優位な立場（人種的マジョリティ）に位置づけている。

こうした自己と他者の差別化の場面で、集団に関するステレオタイプが決定的な役割を演じる。<sup>(注2)</sup> 例えば、「中国人は大きな声で話す」という（知覚に関する）ステレオタイプのもとで中国語の会話を耳にする日本人がいるとしよう。この場合、会話の話題や雰囲気と切り離して音量にばかり注目したり、このステレオタイプと連関する「中国人は傍若無人である」といった（評価に

関する)ステレオタイプにあてはまる振る舞いや態度にばかり注目したりして、「中国人はやはり…である」といった判断を一方的に下したりする。

こうした知覚や評価を行うとき、この日本人は自らを「物静か」で「周囲の人に配慮する」日本人として、外集団である「中国人」よりも優位な立場に位置づける(たとえ、海外では、こうした態度が必ずしも<sup>7)</sup>コウテイ的に評価されるわけでも、優位性を示す特徴とみなされるわけでもないにしても)。この人は、例えば中国人を親にもつ「<sup>7)</sup>ハーフ」の日本人等に対しても、「親が中国人だから…であるはずだ」といった予期を働かせて、内集団において劣った地位(「日本人らしくない日本人」)に追いやることで、自らを「日本人らしい日本人」として優位な立場に位置づけようとするかもしれない。

このように考えると、人種化する知覚の習慣には、ある社会における優位集団への帰属や集団内部の優位性の獲得のために形成され維持されているという側面があるだろう。人が人種化する知覚の偏りをどれだけ指摘されても、それを認めようとしなかったり、偏った知覚が捉える世界のごく一面に執着しようとしたりするのは、それが自己をいかなる集団に帰属する者とみなし、そうした集団をいかに表象するかと切り離せないからだと考えられる。自分の知覚や評価の偏りを認めることは、社会における自分の位置づけや自己のアイデンティティを脅かしかねないからだ。

このことは、人々が人種化の標的とするのが、自分とは縁もゆかりもない集団ではなく、とりわけ<sup>1)</sup>リンゴクに住む外集団(日本人にとつての中国人や韓国人)であつたり、自国に共に住む内集団のなかで周縁化される人々(在日コリアンや「ハーフ」であつたりすることにも見てとれる。例えば、日本の人種的マジョリティが、いわゆる「黒人ハーフ」や「白人ハーフ」と呼ばれる人々に執拗に(親の)出身地やルーツを尋ねるのは、その人たちが自分たちとは異なる外見をもちながら「流暢な日本語」を話すからである。また、東アジア系の親をもつ「ハーフ」にも同様の質問を浴びせて、親の出身地にまつわるステレオタイプを通してそうした人々を人種化するのは、その人たちが自分たちと「外見上見分けがつかない」からだろう。このようにして人種的マジョリティは、自分たちと「似ている」人々を人種化し、その人たちと自分たちを差別化することで自分が属する集団を「洗

「練」しようとするのである。

こうした習慣は、当該社会における人種的マジョリティだけが身につけているわけではない。人種的マイノリティもまた、他の人種集団に対する優位性や自分が属する集団内部での優位性を獲得するために、しばしば他の人々を人種化する。場合によっては、いかなる集団に属しているかを **A** 人種的マジョリティ以上に、そうする必要に迫られることすらある。

以上のように、人種化する知覚は、様々な人種集団のいる社会において習慣的に身に付けるものであり、自己の集団帰属やアイデンティティの維持にも関わっている。ところが、人種化する知覚の特色には、まさに自らの社会的文脈を隠蔽して、生物学的な特徴の知覚を装う、という点が含まれるという指摘がある。例えば、哲学者であるアルルサジによれば、科学的には存在しないとされる「人種」を、相手の身体に備わる自然的な特徴として「自然化 (naturalize)」するのである。この点は、日常に浸透した知覚は、瑣末なものどころか、まさしく人種差別の根幹に関わっていることを明確にする。この点を論じたい。

例えば、エレベーターに乗っていた白人女性が、乗り込んできた黒人男性を見て体をびくつとさせ、持っていたバッグを自分のほうに引き寄せるといふ事例があった。このような事例において、偏見の目で見た側は、エレベーターに入ってきた黒人男性の肉体的な特徴（背丈や体格）が恐怖を感じさせたのであって、人種的な偏見を抱いていたわけではないとか、黒人の肉体を見て怯んでしまうのは「生理的な」反応であり仕方のないことだと弁解や自己正当化をしがちである。ここで問題とされるべきは、偏った知覚の原因を知覚主体たる自己ではなく、知覚対象である他者に求める姿勢である。さらに、相手の肉体のみならずの知覚や反応の原因を求めることは、「人種」という概念が生まれ、機能している歴史的・文化的背景——白人たちによる植民地支配や人種差別の歴史、様々な社会に固有の形で引き継がれた人種をめぐる価値観——を矮小化したり無化したりすることである。人種化された知覚は、「自然化」によって、差別する側をメンセキし、差別される側に問題の根を帰し、さらには差別の社会的背景を隠蔽する。つまり、まさに差別の構造を不断に作り出しているのである。

では、こうした姿勢や人種化する知覚習慣をいかに変えていくことができるのだろうか。アル・サジは、知覚に伴う情動の働き、とりわけ「ためらい (hesitation)」という働きに着目している。私たちは相手を人種化して知覚する際、しばしば戸惑ったり違和感を覚えたりする。こうした戸惑いに対する反応として、一方では、冒頭の例に出てくる販売員のように、マジョリティに属する自分の「標準」から逸脱する相手に質問を浴びせて、相手を自分の理解の枠内（「外国人」、「ハーフ」）におさめることで、自らの知覚習慣を再強化するということがあげられる。他方、同じような場面で、自分が戸惑ってしまったのはなぜなのか、自分が自明視している「標準」の方に問題があるのではないかと疑問に思うなら、相手について即断することを「ためらう」はずだ。このようなためらいは、習慣的な対応を回避しようとしたり、自らの知覚習慣を保留したりするきっかけになりうる。アル・サジによれば、習慣化した知覚プロセスを「減速」させるためらいは、人種化する知覚の見かけ上の直接性を中断し、自らの自然化された知覚や感情（人種化された相手に対する恐怖やいら立ち）を「脱自然化」する。つまり、知覚の原因が相手の身体のうちではなく、社会構造を身体化した主体の知覚習慣の側にある可能性に目を開かせるのだ。このように知覚習慣を自動的で瞬間的なものではなく、時間的なプロセスとして捉え直すことで、人種化する知覚習慣を問い直し、それを変容していくことが可能となる。

もちろん、ためらいだけでは人種化する知覚習慣を克服するのに充分ではない。ためらいを感じても、人種化する知覚習慣に目を向けられないまま、自らの知覚やそれに基づく地位を維持するような自己防衛的な反応が示されることは多い。それゆえ、人種化する知覚習慣を変容していくためには、各人のためらいを惹起するだけでなく、それを維持し生産的なものにする社会実践や環境変容もまた求められる。アル・サジは、この環境変容には、人種化される他者たちと、一定程度継続的に、共に暮らすこと (living-with) <sup>(注3)</sup> が必要だとして、彼女のパートナーであるフランス人の白人男性の例を挙げている。教師である彼は当初、ムスリムの女子児童はヒジャーブをして登校するべきではないと考え、彼女の反論にも説得されることはなかった。しかし、ヒジャーブをする彼女の母親や祖母とモントリオールで日常的に接するなかで見方を変えていき、フランスの公立学校でのヒ

ジャーブ着用を禁止する法律に反対するようになった。

例えば、一度きりの講演会等で人種的マイノリティの話を聴いても、**B** し、そこで得られた気づきやためらいはすぐに「消費」されてしまい、それらを保持し続けることは容易ではない。これに対して、日常生活のなかで目立たないが継続的になされる他者との接触においては、他者たちのあり方や見方を簡単に払いのけることはできず、それらを前反省的な水準で受容するなかで、人種化する知覚へのためらいを維持して、「他者と共に見る (see with others)」ことが可能となる。「他者と共に見る」とは、「他者を視野に入れて見る」ことでも、「他者の立場に立つて見る」ことでもない。先の例で言えば、ヒジャーブをした女性を**C** して見るのでも、そうした女性であればどう世界を見るかを勝手に想像するのでもなく、この女性「と共に」世界——学校で何が起きているのか、法律がどうなっているのか、など——を見て、その世界について語るのである。このような見方の変容は、自らの知覚習慣を揺さぶり、他者との結びつきによって自らの視野を方向づけ直し、人種の自然化とともに忘却された歴史的・文化的背景への関心をもって、世界を見つめ直させる。

(池田喬・小手川正二郎「人種化する知覚」の何が問題なのか? —— 知覚予期モデルによる現象学的分析 ——)

『思想』(第一一六九号、二〇二一年九月)による。出題の都合上、一部中略・改変した箇所がある。

(注1) 茅ヶ崎 —— 神奈川県湘南地域しょうなんの都市。

(注2) ステレオタイプ —— 型にはまった先入観や思い込み。

(注3) ムスリム —— イスラム教徒。アラビア語での呼び方に基づく。

(注4) ヒジャーブ —— アラビア語で「隠す」の意味。通常は、ムスリムの女性が教義に基づき髪を隠すために着用するスカーフのことを指す。

問1 傍線部(ア)～(ウ)と同じ漢字を含む熟語を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、  
15  
～  
17

(配点6点)

(ア) コウテイ  
15

- ① 包圍された犯人がコウフクする。
- ② コウサが舞い上がって視界が悪くなる。
- ③ 発言にシュコウして同意を表す。
- ④ オウコウ貴族が支配した時代。
- ⑤ 臨海の工場でテッコウを製造する。

(イ) リンゴク  
16

- ① そのような行為はジンリンにもとる。
- ② 街の中心部に高層ビルがリンリツする。
- ③ そんなことはクブクリン起きないだろう。
- ④ 人物のリンカクをくつきりと描く。
- ⑤ その大事故はキンリンの住民にも影響する。

(ウ) メンセキ  
17

- ① 生徒会長としてのセキムを果たす。
- ② 結婚式のセキジを決める。
- ③ めざましいギョウセキをあげる。
- ④ 引越す友人がセキベツの涙を流す。
- ⑤ 先人のソクセキをたどる。

## 問2 空欄

A

く

C

を補うのに最も適当なものを、次の各群の①く⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、

18

く

20

。

(配点6点)

A

18

- ① 常に意識しながら生活しなければならない
- ② 国籍を有するゆえ明確に規定されている
- ③ ステレオタイプの日本人像にあてはめている
- ④ わざわざ他人に問いかけることをしない
- ⑤ 日常生活ではほとんど問われることがない

B

19

- ① 環境変容は充分にできるはずである
- ② 知覚習慣が即座に変容することはない
- ③ 他者と共に見ることは可能である
- ④ ムスリムへの理解が深まることはない
- ⑤ よほど熱心に臨まないとは理解できない

C

20

- ① 一体化
- ② 理想化
- ③ 正当化
- ④ 対象化
- ⑤ 恒久化

問3

傍線部X・Yの語の文章中での意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は、  
21 . 22。

(配点4点)

X 傍若無人

21

- ① 周囲に人がいることを意に介さず勝手気ままに行動する様子。
- ② 自己と他者とを区別せず分け隔てのない接し方をする様子。
- ③ 年上の人への敬意が深く自分より若い人にはぞんざいな様子。
- ④ 自分と立場の近い人にだけ共感しそれ以外の人に冷たい様子。
- ⑤ 自分の主張を感情のおもむくまま声に出して表明する様子。

Y 自明視

22

- ① 視覚を信じ見えたとおりのものと解釈すること。
- ② 抽象的な物事を目に見える形にして示すこと。
- ③ 見えた物事のなかに自信や希望を見いだすこと。
- ④ あたりまえのことだとして疑ってもみないこと。
- ⑤ あいまいだった物事を自分の力で説明すること。

## 問4

傍線部(1)「相手を特定の集団に帰属化している」とあるが、冒頭のエピソードに即して言うと、どのようなことか。筆者の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、23。(配点5点)

- ① 相手の日本人らしくない外見を見て、自然な日本語を話しているにもかかわらず、外国人だと認識していること。
- ② 相手が丁寧に質問を重ねてくる態度を見て、周囲の人への配慮がゆき届いた日本人の典型であると感じていること。
- ③ 相手の出自を明らかにして安堵<sup>あんど</sup>するため、本人ばかりか親族の出身地までを幾度にもわたって問いかけていること。
- ④ 自分たちの外見が典型的な日本人ならばするはずのない質問をされ、相手を不作法な人だと決めつけていること。
- ⑤ 相手の外見と言語の印象がくい違っている事態に出会って、相手をどの集団に位置づけるべきかに迷っていること。

問5

傍線部②「それが自己をいかなる集団に帰属する者とみなし、そうした集団をいかに表象するかと切り離せない」とあるが、どういうことか。筆者の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、

24。

(配点6点)

- ① 偏った知覚は、人が自分の位置づけや帰属する国籍を確かなものにするために不可欠ないわば必要悪であるため、偏っていることを自覚しながらも誰もそれを捨て去ることができない、ということ。
- ② 偏った知覚で外見や言語により他人を外集団や内集団において劣った地位に位置づけることが、自分が社会の中での優位集団や集団内の優位な立場にあることを確認することと結びついている、ということ。
- ③ 人種化する知覚によって捉えられた世界の狭い一面こそが、自分が位置づけられる優位集団そのものであり、そこだけを見ていけば集団内部での自らの優位性が獲得されて満足できる、ということ。
- ④ 知覚というものが人が情報を得るための基本的な手段である以上、自己のアイデンティティを確立するための前提となるさまざまな知識や環境も、知覚を通じてしか意識されないものだ、ということ。
- ⑤ 自分の知覚や評価の誤りを認めることは、もの静かで周囲の人に配慮する日本人の要件であるため、それに執着するのはアイデンティティの自己否定につながることに気づいていない、ということ。

## 問6

傍線部③「自らの社会的文脈を隠蔽して、生物学的な特徴の知覚を装う」とあるが、どういうことか。筆者の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、25。(配点6点)

- ① 人種化する知覚は、偏った知覚の原因を相手の身体的特徴に帰して正当化し、自らの社会で共有されている「人種」という概念にまつわる歴史的・文化的価値観をなかつたことにする、ということ。
- ② 人種の区別に科学的な根拠はないとはいえ、実際に外見の違いが認識される以上、集団での優位性に差がつくのは自然なことであるとして、人種化を克服することを諦める、ということ。
- ③ 人種的マジョリティが、自分たちが人種化の思考をやめられないのは社会のなかでの優位性を確保するためだと気づかないゆえに、ときに人種的マイノリティを不快にさせる、ということ。
- ④ 人種化という知覚の原因は、自分の偏見にあるのではなく、もっぱら外見や言語というかたちとして認識できる生まれながらの属性にあると相手のせいにしがちである、ということ。
- ⑤ 人種的マイノリティが、自分たちが集団のなかの異質な存在であることを度外視して、他の人種に対する優位性を獲得しようと人種的マジョリティであるかのようにふるまう、ということ。

## 問7

傍線部(4)「知覚習慣を自動的に瞬間的なものではなく、時間的なプロセスとして捉え直すことで、人種化する知覚習慣を問い直し、それを変容していくことが可能となる」とあるが、なぜか。筆者の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、26。

(配点6点)

- ① 異なる人種に属する人を見たときの恐怖やいら立ちはなかば自動的に起きる感情だと自覚し、それを意図的に回避し克服するよう心がけることで、悪感情をとまわらない人種化ができるはずであるから。
- ② 人種化に基づく理解からはみ出すような相手に時間をかけ熱心に質問を浴びせつづけることによって、次に同じような外見の持ち主に出会う機会があっても、戸惑いを感じる必要がなくなるから。
- ③ 人種化の知覚が違和感や戸惑いによって即断されず一定の時間保留されることで、それを掘り下げて考え、自分の習慣的な知覚プロセスに疑問を持ち、自分の側に原因があることに気づく機会となり得るから。
- ④ 相手の第一印象に基づいて直接かつ瞬時に人種化するよりも、時間をかけてじっくり相手の外見を観察して相手に対する感情を十分に高まらせたうえで人種化するほうが、的確な判断につながるから。
- ⑤ 自分のなかにある人種化の自然化された「標準」が誤っているのではないか、という疑問を時間をかけて考察することにより、相手の人種化の際に違和感やためらいを抱くことができるようになるから。

## 問8

傍線部(5)「人種の自然化とともに忘却された歴史的・文化的背景」とあるが、具体的にどういふことか。本文に即して最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、27。(配点5点)

- ① 普通なら関わり合いを持たない他者とも接触を持ち、学校や法律の環境などをふまえつつ語り合う機会のこと。
- ② 外見を原因とする偏見を正当化するために意識から遠ざけてきた、人種差別の歴史やそれを支える価値観のこと。
- ③ 人類が文明偏重への反省から自然の資源を守る風潮に傾いた結果、見過ごされることが多い文化の恩恵のこと。
- ④ ヒジャーブの着用は単なる装飾ではなく、ムスリムが教義に基づいて身を律した結果であるという認識のこと。
- ⑤ 知覚のプロセスが減速され習慣が保留されることによって失われがちな、相手について即断する力のこと。

## 問9

本文の内容に合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は、28。

(配点6点)

- ① 冒頭に引用されているエピソードは、日本語の流暢さゆえに人種化を免れることができた稀有な例である。
- ② 日本人らしい属性が国際的に高く評価されていることが、日本人による他者の人種化を必要以上に助長している。
- ③ 人種によって異なる外見を有するという生物学的な分析が、人種差別の根幹をなす価値観の裏づけになっている。
- ④ 知覚に伴う「ためらい」は、知覚習慣の偏りを自覚し自己正当化から脱却する結果となることがほとんどである。
- ⑤ 日常生活で「他者と共に見る」ことを継続的に実践することは、人種化する知覚習慣を克服するのに有効である。